空港業務のシステム化

航空事業の大前提は安全性と定時性であると言われる。ここで言う空港業務とは，その航空機を安全かつ快適に飛行させるための，いわば裏方の仕事とも言うべきものを指している。

航空機を利用する旅客や貨物は年々増加の一途をたどっているが，航空機を出発地から目的地まで安全を確保のうえ，定時・快適性を旅客に提供しながら運航させるために空港内各セクションが有機的，効率的に活動している。これら業務の質的向上，安全性の向上に，電子計算機を導入，オンラインリアルタイム化したのが，空港業務システムである。

全日本空輸株式会社では，今春4月から全国35空港に運航している1日当たり約430便の航空便に，本システムを採用しデータの集積，飛行計画の作成，情報伝達などに電子計算機を使い，空港業務の一元集中管理を行なっている。

本システムは，羽田空港のセンターにHITAC8500を設置し，全国の空港に端末を設置し日本電信電話公社回線で結んで，通信システム，運航情報システム，気象情報収集システム及び飛行計画システムの四つを稼働している。

この種システムのオンラインリアルタイム化は我が国最初のもので，その他数々の特色を有している。

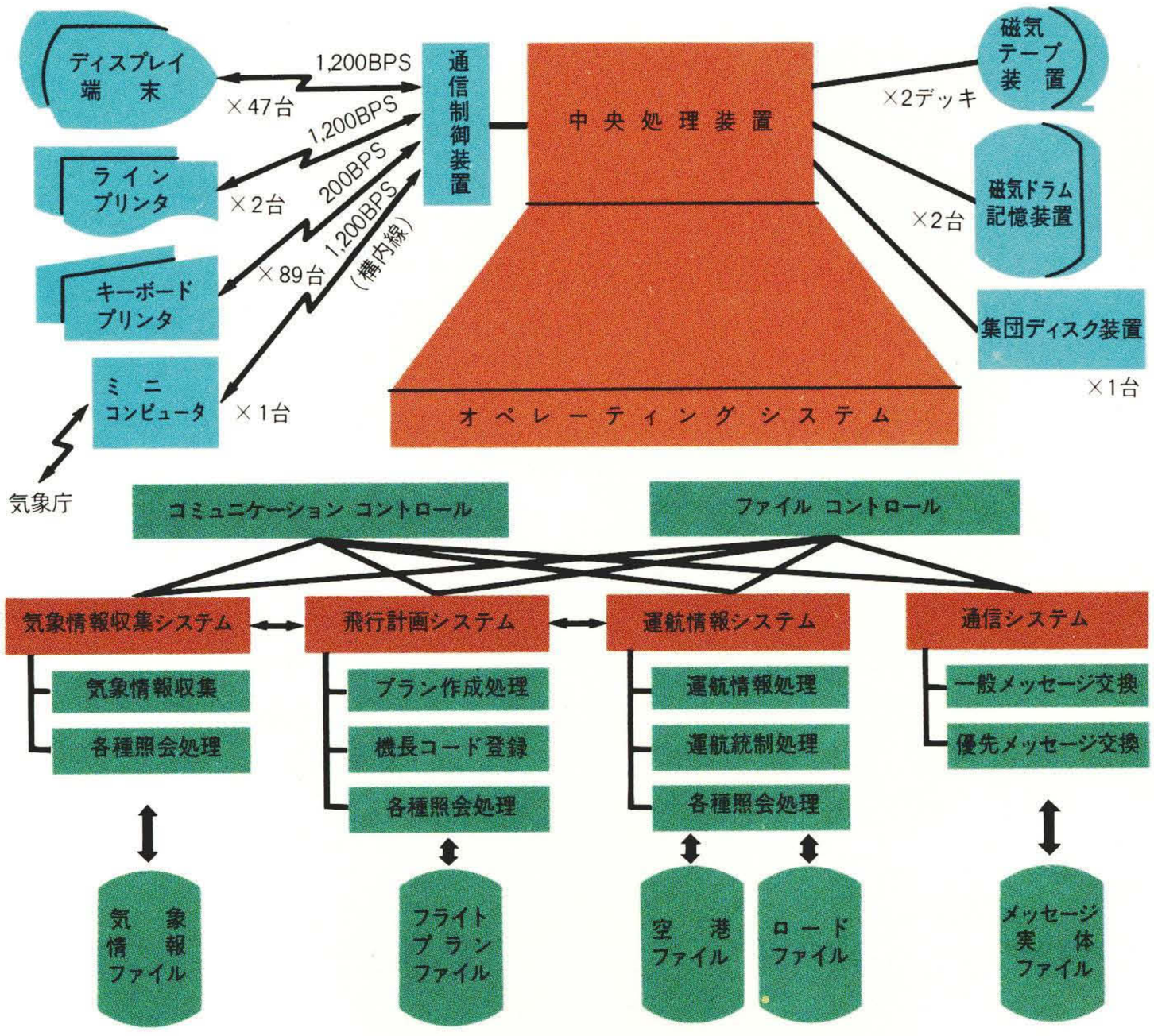
(1) 運航情報システムは，時刻及び機材のコントロールなどを行ない，出発や到着の時刻，遅れや欠航及びそれらに伴う各種情報を関連各空港にテレビ，その他の端末に伝達又は指示する。

(2) 気象情報収集システムは，気象庁と直接結ばれており，最新の気象情報が得られる。この情報から飛行計画に必要な高層気象を含む諸情報を電子計算機により算出することができる。

(3) 飛行計画システムは，航空機の出発1時間前に，運航管理者（ディスパッチャー）による飛行計画の作成を義務づけられており，機長の選定避難空港の指定，あるいは気象状況によって数種の飛行計画の作成など，従来手数のかかった事柄を簡素化し，運航管理者がより高度な判断業務に専念できるようになった。

(4) 通信システムは一般社内報のメッセージ交換を行なうシステムで，上記3システムのベースとなっている。

このように空港業務システムは，気象情報，飛行計画の即時把握及び情報収集の迅速化と情報内容の的確化を進め，運航管理者の負担を軽くし，空の旅の安全性と定時性の向上に，大きな効果を上げている。



空港システムの概要